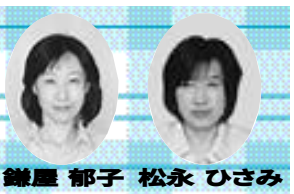
いながわ 特派員報告



鎌屋 郁子　松永 ひさみ

果物づくりにチャレンジ！

猪名川町の地場野菜は私達住民にとって馴染み深いものですが、地元の果物というと柿や特産品の栗以外はあまり見かけないように思います。

ここ数年、兵庫六甲農業協同組合（ＪＡ兵庫六甲）では、猪名川町の果物の生産量を増やしていこうという動きがあります。そんな中、果物作りに挑戦する人達が少しずつ増えてきました。質の高い果物を作るため、日々努力を続けられている3人を訪ねました。

町内の果樹栽培状況

昔から猪名川町を代表する果樹として栗が有名ですが、木の高樹齢化や放任栗園の増加などから生産量が年々減少しています。「道の駅」の品揃えを見ても、野菜が中心で果物は少ないようです。実際、昨年度の道の駅での果樹販売高は、青果全体の３・２％に過ぎず、その60％以上を栗と柿が占めています。

ＪＡ兵庫六甲では、町内での果樹生産を増やしていこうと、柿、梨、梅、桃、栗、りんご、ぶどう、ゆずなどの果樹の苗木購入の助成を行っています。また、昨年から営農講座果樹コースが開設されました。この講座は、果樹の剪定の方法、病害虫の駆除、土作りなど果樹作りのノウハウを学ぶもので、現在20人が熱心に果樹作りを学んでいます。

高品質の果樹を目指して

町内の農業の普及、指導には宝塚農業改良普及センターが携わっています。普及センターは、ＪＡ兵庫六甲と協力して、道の駅を核とした農村の活性化を図っています。最近では生産量の少ない果樹栽培に力を入れ、農家とともに、量よりも質の高い果樹作りを目指しています。指導した農家が品質の良いものを作り、それが市場で高い評価を得ることは、普及センターの人達にとっても大きな喜びです。

永年性作物である果樹の栽培は、野菜と比べると初期投資が必要だったり、収穫に時間がかかるなど難しい点があります。しかし、その分やりがいのあるものだといえるでしょう。町内でより多くの人が果樹栽培にチャレンジして欲しいと思います。

農作物の残留農薬が問題になっている昨今、地元で採れたものは、消費者にとって何より安全で安心して食べられます。猪名川産の新鮮な果物が、店頭に並ぶ日が待ち遠しいですね。

農業に企業のノウハウを

中村　信行さん（上阿古谷）

丹精込めて作ったいちごを収穫する中村さん

上阿古谷の田んぼの中に並ぶ広さ3,696㎡の２棟の温室。中で育っているのは、奈良で生まれたいちごの新品種、アスカルビー４万株です。中村さんは昨年脱サラをして、このアスカルビーの栽培を始めました。

企業人だった中村さんが目指したのは企業経営のノウハウを活かした新しい農業です。独自の販売ルートをつくり、温室にはさまざまな工夫を凝らしました。その中でも画期的なのが、天井から吊り下げた栽培ベンチです。簡単に横移動できるので、同じ温室の中で従来の1.5倍の量が栽培できるうえ、ベンチの下の空間を育苗に活用できます。多くの人がこの温室の見学に訪れています。今年の１月、真っ赤に実った大粒のいちごは、道の駅やスーパーで販売され、甘く日持ちがいいと好評を得ました。７月まで出荷できるのも暑さに強いアスカルビーならではです。

「他と競争していい物を作りたいですね。将来は観光いちご園もやってみたいです」と、中村さんのチャレンジはこれからも続きます。

まだまだ勉強中です

福井　清治さん（猪渕）

▲まだ青い柿の実の様子を見る福井さん

福井さんは減反により米作りをやめた後、その代わりとして６年前から柿作りを始めました。現在100本の富有柿の木が、猪渕の山あいに育っています。柿は他の果樹より比較的農薬散布が少なくてすみ、作りやすいとのこと。

昨年初めて道の駅に少量ですが出荷され、評判は上々だったようです。７月下旬取材で伺った時には、７年目の若い柿の木に小さな青い実が実っていました。今年も福井さんの柿が、道の駅で販売される予定です。

福井さんは「営農講座に参加し、いろいろ教えてもらっています。商品として出荷するには、やはり手入れが大切です。まだまだ勉強中ですよ」と語られました。

果物作りには夢がある

北上　倫聖さん（北田原）

▲一房一房大切にぶどうの袋がけをする北上さん

猪名川荘園の高台に総面積60ａの果樹園があります。入り口にぶどう園、その奥に桃園、プラム園、柿園と総数200本のまだ若い果樹がすくすくと育っています。北上さんは３年前会社を辞め、あたり一面の雑木林を一人で切り開き、果樹の苗を植えました。まったく初めての果樹作りに、ＪＡ兵庫六甲や農業普及センターの指導を受けながら試行錯誤の挑戦をしています。木はいずれも幼木で収穫できるまでにはまだ時間がかかりますが、その中でぶどうは今年、りっぱな房をつけました。紫色の大粒のピオーネです。枝の剪定や土作り、粒をそろえるための摘粒、袋がけと、思った以上に手入れは大変だったとか。しかし、「果物作りには夢があります。品質重視で作りたいです」と北上さんは話されます。そのためにも農薬使用を最低限にし、桃の下にはナギナタガヤを植えました。これは、雑草を抑えて茂り枯れた後は堆肥となります。順に他の果樹の下にも植えていく計画です。

そろそろ収穫の時期、北上さんのピオーネが道の駅に並ぶ頃です。あと何年か後には、桃や柿も・・・。北上さんの夢はこれからひとつひとつ形になっていきます。

編集後記

味覚の秋です。お店に梨やぶどうが並ぶようになりました。残暑は厳しくても、果物が秋の到来を教えてくれる気がします。取材に伺った農園は今、どんな秋の景色なのでしょう。果物が色付いて、たわわに実った農園の風景は、想像するだけで幸せで楽しい気持ちにさせてくれます。

それにしても、私たちの食生活は農家の皆さんのチャレンジ精神と丹精あってこそ豊かになるのだと、つくづく感じた今回の取材でした。

【いながわ特派員】